京都の町家の二階表における土塗格子開口の定着

THE ORIGIN OF WOODEN LATTICE IN THE WALL ABOUT MACHIYA OF KYOTO

丸山 俊明*

Toshiaki MARUYAMA

This paper is an analysis of the origin of wooden lattice in the upstairs wall about machiya (town-house) of Kyoto in the Edo period. In previous studies, the wooden lattice was compared to tea-cottage window. However, this paper points out the origin of the wooden lattice was window of wooden warehouse in 16th century, and this design was imitation of same lattice window or Sama (opening in the wall) in the barrier of castle which was constructed by feudal lord.

Keywords : Kyoto, machiya, wooden lattice, Opening in the wall, mushico
京都、町家、土塗格子、塗窓、むしこ

はじめに

本論は、京都の町家の二階表（二階の表通り側）に、土塗格子を並べた開口（以下、土塗格子開口）が定着した経緯を取り上げる。

土塗格子開口は現在「むしこ窓」と通称され、京都を特徴付ける要素^{注1)}として、名称の意味や変遷に日向進氏^{注2)}や高橋康夫氏^{注3)}、筆者の研究^{注4)}がある。しかし周辺眺望や採光、通風を制限する土塗格子開口が、町家の二階表に定着した経緯は明らかでない。日向進氏は江戸前期の「虫籠」が出格子で、土塗格子開口は「塗窓」と称された事を明らかにされ、その上で防火性を認められたが、中村利則氏が真壁に開く点を指摘して否定された^{注5)}。池田俊彦氏が強調された防犯性^{注6)}は、中村昌生氏が「非常の時には土格子を梃子で外し逃げられるように配慮されている」と土塗格子の外し易さを指摘された^{注7)}。その中村氏は「デザインとして広く登場してきたもの」「下地窓の発想にも通じる」「京のむしこ造りは、重厚堅牢な江戸の塗籠造りとは本質的に違う造形」つまり意匠的選択とされたが、住環境を制限する点には触れられていない。また18世紀以降の江戸と京都の町なみの違いを文化風土面から説明する見解は玉井哲雄氏や伊藤毅氏にもあるが^{注8)}、17世紀の絵画史料では江戸に「京のむしこ造り」（図1）、京都に「江戸の塗籠造り」があり、18世紀の相違は防火政策の影響をみるべきである（後述）^{注9)}。そしてかくいう筆者も、土塗格子開口の定着に、以下二度の機会を推測した事がある^{注10)}。

- ①16世紀末：豊臣政権の二階建奨励策により二階建の町家が増加、しかし二階の居室利用の習慣がなかった町人は二階を物置とする場合があり、通風・採光口として土塗格子開口を開けた。
- ②17世紀中頃：徳川政権が町人の奢侈建築を禁止すると共に周辺眺望を規制したとき、規制に従った開口形式として増加した。しかし筆者は、近世初頭の京都の町家土蔵の配置を検討する過程

図1 17世紀『江戸図屏風』(部分、国立歴史民俗博物館蔵)

で^{注11)}、土塗格子開口が土蔵建築と不可分の関係で出現した可能性をみた。中世には町家内部にあった土蔵（内蔵）が、近世初頭の治安回復を受けて表出し、敷地奥の庭蔵や町家から突き出す突出内蔵、表通りに屹立する表蔵になった時、それらの塗籠大壁に土塗格子開口が現れる。そして町家でも、土蔵造（分厚い塗籠）や塗家（薄い塗籠）に土塗格子開口が現れる。ただし町なみの大勢は板葺真壁で、二階表は大開口にして内部を居室化する。つまり①は町なみ形成の主要因にならず、規制発動後に定着つまり②が観察されるのである。

そこで本論では、規制前後の絵画史料を観察し（第1、2節）、近世城郭建築との関係も検討して（第3節）土塗格子開口が京都の町家の二階表に定着した経緯と、位置付けの変遷を検討する（まとめ）。これにより京都の町家研究に寄与する事を目的とする。なお絵画史料は現実を映した確証がなく、描かれない要素が存在しない証拠にもならないが、複数史料に町なみの大勢を窺う事は可能と考える。また土塗格子開口の名称は、日向氏や高橋氏、筆者が指摘したように塗窓から現在の通称「むしこ窓」に至る迄に歴史的変遷があった。その過程には見解が分かれるが、主に江戸前期を取り上げる本論では、その形態に従って土塗格子開口または土塗格子と記す事にする。

* 住環境文化研究所 学博

Culture and Life Environment Laboratory, Ph.D.

第1節 建築規制以前の絵画史料にみる二階表

第1節第1項 16世紀・中世末期

図2 二階表の一部を張り出す中世の町家

15世紀に一休宗純は「街坊の間、十家に四五は娼楼」(『狂雲集』)と記し、二階建の増加を伝えたが、応仁文明乱後を経て16世紀前半の歴博甲本『洛中洛外図』屏風(国立歴史民俗博物館蔵)では、380の町家の中に二階建は6棟しかない^{注12)}。16世紀後半の上杉本『洛中洛外図』屏風(米沢市上杉博物館蔵)でも300の町家の中に13棟で、中世京都に平屋の大勢が窺える。また僅少な二階建の二階表には土塗格子開口が見当たらず、大開口に水平材を入れて内側に竹の堅子を並べる町家が多い。通庇に張出しを持つ町家もあって二階の居室利用が窺えるが(図2)、その張出しにも有無がある。つまり中世の町家の二階表には、土塗格子開口は定着していない。

第1節第2項 16世紀末・近世初頭

図3 二階表の大開口

図4 左に手摺付の大開口、右に平格子

16世紀末に築城・破却された聚楽第を描く『聚楽第図』(図3、三井記念美術館蔵)では、大手門前の長者町に板葺真壁の本二階建が並ぶ。「表は二階造にして角柱に作るへし、屋並高下なきよう仕候てしかるへし」^{注13)}と伝えられる豊臣政権の二階建奨励策を受けた町家群で、二階表は土塗格子開口ではなく大開口である。その内部では座敷が居室化を示し、豊臣政権に二階の居室化や周辺眺望の規制意図がなかった事が分る。敷地奥には本瓦葺で漆喰塗籠の建物があり、庭蔵と推測されるが、開口形式は確認出来ない。

同時期の福岡市博物館本『洛中洛外図』屏風でも二階建が多く、二階表は大開口に板戸(雨戸)や平格子、出格子に分かれる(図4)。居室化した二階表のデザイン選択肢と思われるが、土塗格子開口は見当たらない。したがって①見解(はじめに)は近世初頭の町なみにおいて大勢ではなかったと判断され、同見解を撤回する。

第1節第3項 17世紀初頭・江戸初期

勝興寺本『洛中洛外図』屏風が描く17世紀初頭は、徳川へ政権移行期にあたる。二階建が並び、二階表は平格子が類型化して居室化の進行を示す一方、土塗格子開口は見当たらない(図5)。しかし同

時期の出光美術館本では、本瓦葺で全体が漆喰塗籠の町家があり、二階表が土塗格子開口のように観察される(図6)。同図には他にも全体が漆喰塗籠の町家があり、妻壁に土塗格子が確認されるので、遅くとも17世紀初頭には、漆喰塗籠の町家の二階表に土塗格子開口が存在した可能性が大きい。ただし町なみの中では僅少で、大勢は板葺真壁が占める。それらの二階表は大開口に板戸や平格子、出格子となっており、意匠的な火頭窓も現れるが土塗格子開口はない。

図5 真壁の二階表に平格子

図6 漆喰塗籠の二階表に土塗格子

図7 塗家の二階表の土塗格子

図8 突出内蔵の土塗格子

第1節第4項 17世紀前期・江戸前期(1)

豊臣氏が滅亡した元和期(1615-23)初頭の大坂市立美術館本『洛中洛外図』屏風でも、多くの町家は板葺真壁で、二階表は大開口に板戸や平格子、出格子が居室化を示す。僅少な漆喰塗籠の町家だけが二階表を土塗格子開口とし、先の出光美術館本と一致する(図7)。

なお漆喰塗籠の町家は、寛永期(1624-43)初頭の『江戸図屏風』(国立歴史民俗博物館蔵)や『江戸名所図屏風』(出水美術館蔵)にも確認され、17世紀には両都市に存在していた事が分る。

さらに大坂市立美術館本では、庭蔵や、真壁町家の板葺屋根から突き出す突出内蔵にも土塗格子開口がある(図8)。塗り重ねが必要な土蔵建築には真壁以上の建築費用が必要とされ、その目的を、山田幸一氏が12世紀『台記』の記述「四方皆拵之以板、其上塗石灰、其戸塗蟻灰、為不令剥落也」や、延慶2年(1309)『春日権現記絵巻』絵図の土蔵(屋根が焼け落ち全漆喰塗籠)に指摘された防火性・防犯性の確保にみるなら^{注14)}、土塗格子開口には土戸の併用も推測される。この点でも高価な漆喰塗籠の町家や突出内蔵、そして表蔵を、短冊形敷地の奥に庭蔵を隠し置く事も出来た町人が、防犯性に影響しかねない表通り沿いに屹立させた目的は何か。それは後に徳川政権から表蔵規制を受ける事に明かなように(後述)、富裕性の表徴であったと思われる。当時はまだ二階表に大開口も選択できた筈の町人が、住環境にも影響する土塗格子開口を選択した理由も、まずは防火・防犯性の確保にあったとしても、漆喰塗籠とセットで富裕性の表徴、富裕表現の一部とみなしていた可能性が大きい。

第1節第4項 17世紀前期・江戸前期（2）

元和6年（1620）の徳川和子入内を描く個人蔵『洛中洛外図』屏風^{注15）}では、薄い塗籠つまり塗家の二階表に、三角穴を開ける町家があるが、本瓦葺ではなく板葺である（図9）。また、同時期の林原美術本『洛中洛外図』屏風では、町家は薄い塗家なのに、突出内蔵だけを分厚い塗籠の土蔵造にする例もある（図10）。さらにまた、塗家なのに二階表を大開口形式にして居室利用に備えた町家もあるが、このような大開口に土戸の併用は考え難い。これらの事から、当時の町家は、防火性・防犯性を求める部分は本瓦葺土蔵造として土塗格子開口に土戸を併用する一方、単なる富裕表現は塗家とし、板葺や意匠的な穴、大開口も取り入れるようになったと考えられる。

図9 塗家の二階表に三角穴

図10 塗家から突出内蔵

もっとも町なみにおいて塗家や土蔵造の僅少は変わらず、増加傾向はない。大勢は板葺真壁で、二階表は大開口に板戸や平格子、出格子、また火頭窓や櫛形窓が現れ意匠化傾向が進んでいる。

第1節第5項 17世紀中頃・江戸前期（3）

寛永期（1624-43）初頭の萬野美術館A本『洛中洛外図』屏風でも、町なみの大勢は変わらない。土塗格子開口を持つ塗家も僅少のままであるが（図11）、土蔵造の表蔵は元和期よりも増加したように観察され、土塗格子開口を設けて土戸の併用が推測される。

図11 塗家二階表の土塗格子

図12 表蔵と真壁に土塗格子の町家

そしてこの頃の板葺真壁の町家で注目されるのは、少数ながら二階表の土塗格子開口が観察される点である。図12の左側の表蔵は、面格子付小開口の内部を土色に塗って土戸の閉鎖状態と判断される。これに対して右側の町家は、板葺の真壁なのに、二階表が土塗格子開口である。塗籠大壁の防火性・防犯性が認識される当時、真壁に同様の性能が期待されたとは考え難い。また町なみの大勢を占める真壁に土塗格子開口を開けても、富裕表現にはならない。このような土塗格子開口は単なる通風・採光口と考えられるのであり、その住環境への影響から判断して内部は物置・倉庫の可能性が大きい。

寛永期中頃の京国博本『祇園祭礼図』屏風にみる表蔵は、開口一杯に亀甲金網が張られる（図13）。網には防犯意図が明らかなので、これ迄の土塗格子にみた防犯性も裏付けられるが、防火性の必要も変わらない筈なので、内側に土戸の併用も推測される。また同屏風の町家には塗家や土蔵造が見当たらず、すべて真壁である。それらの二階表に土塗格子開口が一例だけ（図14）、他は大開口として内部を居室とする。一例のみの土塗格子は、柱より薄い真壁に開く点に外し易さが窺われ（はじめに）、土蔵造や塗家の土塗格子のような防火性・防犯性が期待されていたとは考え難い。出格子の両脇という左右対称の配置からしても、意匠的な通風・採光口と観察される。

図13 表蔵の網入開口

図14 出格子の両脇に土塗格子

また同時期の永青文庫本『祇園祭礼図』屏風では、板葺真壁の二階表に、丸や四角の穴が開いている（図15）。その形状に内部の居室利用は考え難く、これも物置や倉庫の通風・採光口と思われる。

以上、規制以前の絵画史料からは、次の経緯が観察される。

近世初頭には板葺真壁の二階建町家が増加、二階表には大開口に板戸や出格子、平格子が装置されて居室化を示す。土塗格子開口は確認されず、町なみの大勢にはならなかった。それよりも土塗格子開口は、庭蔵や突出内蔵、表蔵に現れ、町家では僅少な土蔵造や塗家の塗籠大壁に現れる。これらの町家は、防火性・防犯性確保の目的に加えて、漆喰塗籠の大壁と共に、富裕表現であった事が窺える。

図15 板葺の真壁の二階表に開く丸や四角の穴

ところが江戸前期の元和期に、二階表に意匠的な穴を開ける塗家や、真壁に土塗格子開口が現れる。不燃材の真壁や間隔の狭い土塗格子、小さな穴にも一応の防火性・防犯性は窺える。しかし、既に塗籠の防火性や金網の防犯性が認識され、居室化した二階は大開口や出格子、平格子が多い中で、これらには安価な開口形式という位置付けが推測される。丸や四角の穴も、この位置付けを失わない中での遊びと考えられる。そして物置・倉庫に用いられたと思われるが、防火性・防犯性に劣る点是否めないで、重要性の低いものを保管、あるいは使用人が寝起きの場所にした可能性も想像される。

寛永期になると、町家の土蔵造や塗家は減少し、真壁が殆どとなる。その要因について、盆地の京都は夏に蒸し暑さが増すから、二階の居室化が進めば、通風のよい大開口を求めるのが自然であろう。一方、土塗格子開口を備えた土蔵造や塗家の二階は、通風だけでなく周辺眺望や採光つまり住環境面で劣る。また漆喰塗籠の大壁は、幕末の城郭写真にみるように剥落しやすく、頻繁な補修が必要であった。つまり土蔵建築の町家は住環境面で劣り、維持費用も嵩むので減少し、防火性・防犯性が必要な物は表蔵や庭蔵に納めたと思われる。その中で表蔵は富裕表現でもあったろうが、大勢を占める真壁町家では、後に規制対象となる本瓦葺や金看板、楡形窓、金銀張の揚見世、金屏風や唐紙張等が富裕表現^{注16)}になったと思われる。

第2節 建築規制以降の絵画史料にみる二階表

第2節第1項 17世紀中頃・規制発動直後の状況

寛永19年(1642)、京都所司代は京都の町人に「町人作事、自今以後、結構=仕間敷事」^{注17)}と触れ、町家の「結構」つまり富裕表現を規制した。同年の下京菊屋町の町式目(「作事致申候定之事」)は、近隣と揃えた整地(「地ぎやうつき申候時=両隣何も町中へ断申相対仕、何もがてん被成候へ、地ぎやうつき可有候、乍去何も町次見合可仕事」)や、三階蔵規制(「蔵御立候時三かい可為無用候」)を「御公儀御触廻」として定めており、所司代の規制内容が窺える。同町式目は後文に「二かいに而も其上=座敷7作何方7見申様=作#事堅仕間敷事」^{注18)}とも記し、以前筆者は蔵座敷(庭蔵に座敷をのせた土蔵)規制と解釈していたが、その後の町なみの低層・均質化から周辺眺望規制と二階座敷規制とみる見解に改めた^{注19)}。このほか上京清和院町の『御公儀町帳』には明暦2年(1656)5月の年記で「表蔵立申事法度也」とあり^{注20)}、表通りに屹立する「表蔵」が結構な富裕表現として規制される。これにより土蔵建築の突出内蔵や土蔵造・塗家の町家も規制された可能性が大きい。これは江戸も同じだった筈だが、その江戸にだけ18世紀に再び土蔵造や塗家が現れるのは防火政策の影響であって文化風土が醸成したわけではない(はじめに)。

図16 左から土塗しない平格子、出格子、土塗格子

もっとも17世紀後半の『洛中洛外図』屏風等の絵画史料をみると、表通り沿いの表蔵や町家の土蔵造・塗家が直ちに消滅したわけではない。また二階の居室も、例えば明暦期(1655-57)の八幡山保存会本『祇園祭礼図』屏風をみると、二階表の平格子や出格子、土塗格子は堅子が細く縦長になり(図16)、周辺眺望や通風、採光といった住環境への影響は小さいように観察される。土塗格子開口の内部にまで座敷が確認される町なみこそ、16世紀以来の二階居室化の極相を示すと思われる。もっともこれら二階表には町人の姿がなく、既に周辺眺望規制や二階座敷規制が発動した中で町人が二階利用を控える状態と推測され、大開口が描かれない理由もこの点に窺える。

第2節第2項 17世紀中頃・規制の影響の建築化

浅井了意は寛文5年(1665)『京雀』^{注21)}に、京都を「おなじやうなる家づくり」と記し、挿図に多様な職業の町家の一階表を描いたが、二階表はみえない。17世紀後半の二階表に描写すべき特徴がなかった可能性があり、その姿を浅井了意が『京雀』の3年前に著した『かなめ石』^{注22)}にみると土塗格子開口である(図17)。

図17 二階表に土塗格子開口を持つ町家

丸や四角の意匠的な穴も見当たらない町なみは、貞享-元禄期(1684-1703)の井原西鶴本の挿図にもある。防火性の低い真壁は表蔵規制に従う仕様であり、住環境に影響する土塗格子開口も、周辺眺望規制や二階座敷規制に従った開口形式と考えられる。さらに加えて安価な開口形式でもあった点に、当時の土塗格子開口の位置付けと、町なみにおける定着理由が窺える(写真1)。

写真1 格子の見込幅で周辺眺望が妨げられる(川北家住宅)

図18 遊郭街の門前に立つ町家、二階表に土塗格子開口と出格子

所司代の規制から36年後、「延宝六年」(1678)の書き込みを持つ『遊楽図』屏風(たばこと塩の博物館蔵)には、内側に明り障子を備えた出格子がある(図18)。堅子を並べて周辺眺望規制に従うが、明り障子の内側には居室利用が窺われ、寛文7(1667)の俳諧に「蛛の巣や二階棒の虫籠窓」^{注23)}と詠まれた「虫籠窓」もこの形式と思われる。二階内部の居室利用は規制に従わないが、内部規制の実効性に問題がある事は以前に指摘した^{注24)}。規制の実効性は外観に関して顕著であり、堅子を並べる出格子は周辺眺望規制に従っているとして許された可能性が大きい。また『遊楽図』屏風の粉本とされる小西家蔵『風俗画面稿』^{注25)}には、土塗格子の間に「みすすたれ」「すたれ」と書き込まれ、当時は内側にすだれを吊っていた事が分る。その目的を日差し除けや埃除けに窺えば、規制以前と変わらず、物置・倉庫の開口として多く用いられていた事が窺える。

さらに 18 年後の元禄 9 年（1696）、下京の光円寺が中井家へ提出した「光円寺建直居宅図」^{注26)}に「二階南方二間半ノ土まどあり戸入」とある（図 19）。「土まど」は土塗格子開口、内側の「戸」は 1 階の「戸三」「戸四」から板戸（雨戸）と判断される。よって日中は『遊楽図』屏風同様に板戸を開けすだれを吊る状況が、そして土塗格子開口は規制に従って安価との位置付けが続いている事が窺える。

図 19 「光円寺建直居宅図」より指図（部分、筆者模写）

重ねて 12 年後、宝永大火（1708）京都を灰燼に帰し、その復興が 17 世紀中頃以来の建築規制の徹底機会となる。表蔵も敷地奥に曳かれ、京都の町なみは低層・均質化する。その町なみを、正徳元年（1711）頃を描く今井町本『洛中洛外図』屏風にみると、町家の二階表では出格子と土塗格子開口が半ばする^{注27)}（図 20）。このうち出格子内部には居室利用が、土塗格子開口の内部には物置が推測される。また出格子には増加傾向があり、規制前と同じ居室化の進行が窺える。

図 20 二階表に出格子と土塗格子開口が半ばする正徳期の町なみ

なお宝永大火で類焼した三井越後屋京都本店の再建史料に、土塗格子開口は「鼠ぬり窓」「鼠土窓」とある^{注28)}。芝居小屋の「鼠木戸」からして小さい土塗格子開口であるが、三井家ほどの豪商が、安価という理由で二階表に用いたとは考え難い。また周辺眺望規制に従うなら出格子も選択肢だった筈で、それでも土塗格子開口を選択した理由には、発動後の規制の実効性は町人間の相互規制で担保された事が想起される。二階表の選択肢が出格子と土塗格子開口に分かれる中、三井家周辺では土塗格子開口が標準形式化していたので、周囲の町家に合わせてこれを選択したという可能性を指摘できる。

また宝永大火から 80 年、天明大火（1788）後の大工文書^{注29)}では土塗格子が「むし子」と記され、「むし子障子」という安価な明り障子が併用される。日向氏は同大火後に建築費用が嵩む出格子の減少と安価な土塗格子開口の増加を指摘されたが^{注30)}、今井町本『洛中洛外図』屏風にみたような二階の居室化が相当進んだ状況が、具体的には土塗格子開口の内部も居室利用する状況が生まれていた筈で、その過程で土塗格子開口も二階居室の開口形式に加えられて、既に明り障子が併用されるようになっていた可能性が大きい。

以上、土塗格子開口は、周辺眺望規制や二階座敷規制に従う安価な開口形式として定着したのであり、この点で②見解（はじめに）を裏付ける。さらにまた、出格子と共に町なみの標準形式となり、両者の選択は費用問題に加えて町人間の相互規制も影響した可能性が大きい。そのため豪商も、周辺状況によっては土塗格子開口を二階表に用いた。江戸末期に顕著となった土塗格子を縦長にする傾向も（写真 2）従来の位置付けや町人間の相互規制が機能する中で、二階天井高を上げる居室化を反映した変容と考えられる。

写真 2 元治大火後の町家（『京郊民家譜』1931 から転載）

第 3 節 城郭建築と土塗格子開口

絵画史料では、豊臣政権の二階建奨励策以前は、町家の二階表に土塗格子開口が見当たらなかった。それは慶長期（1596-1614）から観察されたのである（第 1 節）。そうすると土塗格子開口は、同時代の別の建物から、この時期に表出した町家の土蔵建築部分に導入された、つまり意匠的根拠は他に存在した可能性がある。この点をふまえて同時代の遺構や指図に意匠的根拠を窺うと、例えば慶長 14 年（1609）池田輝政築城の姫路城（姫路市本町）等、この時期の多くの城郭建築が、本瓦葺で漆喰塗籠の城壁を廻らせて、土塗格子開口を並べている。これらの土塗格子開口は土戸を併用する場合が殆どで、それはちょうど当時の土蔵造や塗家の町家が本瓦葺漆喰塗籠に土塗格子開口を備え、土戸の併用も推測される事と同じ関係である。

そして京都でも、天正 15 年（1587）築城の『聚楽第図』に土塗格子開口をみるが、これは大手門前の町家にもみる突上板（図 3）を付けており、町人が見上げやすい外堀城壁は真壁であった。ところが慶長 8 年（1603）徳川家康築城の二条城になると、多くの第二定型『洛中洛外図』屏風に本瓦葺漆喰塗籠の外堀城壁が描かれる。その城壁には、突上戸のない土塗格子開口（築城史料^{注31)}では「連子窓」、堅子は「窓ノ子」が連なる。ちょうど町家でもこの時期に漆喰塗籠の土蔵造や塗家が観察され、本瓦葺や二階表の土塗格子開口と共に富裕表現とみた（第 1 節）。したがって、これらの意匠的根拠は、近世の城郭建築にあった可能性がある。中世には存在しなかった白亜の城壁が聳え立つ姿は、統一政権の絶対権力を強く印象付けた筈で、その視覚的効果を目の当たりにした富裕町人が、本瓦葺漆喰塗籠の大壁や土塗格子開口を町家に用いたのではないかと。それは町家の意匠的な穴（図 15）が、城郭城壁に穿かれた矢狭間・鉄砲狭間（写真 3）に近似する事にも窺える。さらにまた近世初頭の町家の建築的発達には、周知のように城郭大工の関与が推定されている。先の慶長 8 年築城の二条城も、棟梁を務めたのは京都幕府御大工中井家の家祖となる中井大和守正清であり、その配下の今奥出羽平政隆が寛文 11 年-貞享 3 年（1671-1686）に著した『愚子見記』^{注32)}には「諸

色建渡之事、町家/大鉢ハ一式立渡百目坪」「町家ハ軒短キ故、下坪ニ四割増、亦ハ四割半増ニ大方合フ也」とあって町家建築への関与が読み取れる。同じ『愚子見記』には「矢狭間之事、堅狭間ノ長一尺二寸、横四寸、丸狭間指渡四寸、三角・四角何も方六寸宛也」ともあり、丸や三角、四角の狭間についても記していて、やはり城郭大工による町家への意匠的関与を窺わせている。勿論、町場大工が城郭建築を模倣した可能性もあるが、いずれにしても中世の町家に見当らない土塗格子開口は、本瓦葺や漆喰塗籠の大壁と共に近世城郭建築に意匠的根拠が窺える。それでも土蔵造や塗家の町家が大勢にならなかったのは、豊臣政権の二階建奨励策から30年程経過して前述の住環境の悪さや補修費用の負担が明らかとなり、防火性・防犯性を必要とする場合は表蔵や庭蔵、町家は風通しのよい大開口を備えて補修頻度の少ない真壁という選択と、さらに規制の影響が考えられる。

写真3 近世城郭建築の狭間（姫路城）

本論のまとめ

本論は、京都の町家の二階表における土塗格子開口の定着を検討するため、絵画史料を観察して城郭と比較した。既往研究は現存遺構の真壁の土塗格子開口を論じ、土蔵造や塗家の町家の存在や二階表における土塗格子開口の位置付け、その後の変化や建築規制、さらに町人間の相互規制の影響に視点がなかったが、本論はこれらの点を注視した。その結果を以下にまとめる。

京都の町家は、近世初頭に板葺真壁の二階建が増加し、二階表に大開口形式が増加した。土塗格子開口は庭蔵・突出内蔵・表蔵、さらに土蔵造や塗家の町家といった土蔵建築に現れ、防火性・防犯性確保や富裕表現が窺える。意匠的根拠は同時期の城郭遺構に、そして城郭大工による導入が推測され、意匠的な穴も同様である。

しかし町家の漆喰塗籠を富裕表現とみる傾向は、寛永期には減じたように観察され、寛永期中頃からは真壁の土塗格子開口も確認されて、安価な開口形式へ位置付けの変化が窺える。もっとも町なみの大勢は板葺真壁で二階表は大開口という居室利用に備えた町家が増加した。一方、導入から30数年が過ぎた土蔵造や塗家の町家は、おそらく周辺眺望・通風・採光への影響や補修負担が明らかとなり、減少していった。防火性・防犯性は表蔵や庭蔵に求められ、富裕表現は真壁町家の細部意匠や内部舗設への移行が推測される。さらに17世紀中頃の建築規制発動以降、町家の二階表は表蔵規制の影響もあって真壁が徹底され、土塗格子開口は周辺眺望規制や二階座敷規制に従った安価な開口形式として、出格子と共に町なみの標準形式になった。この両者からの選択は費用問題のほか町人間の相互規制が作用した可能性もある。さらに江戸後期には、土塗格子開口は居

室化の影響を受けて二階居室の開口としても定着し、二階天井高が上がった江戸末期には土塗格子の縦長化も観察されるようになる。

謝辞 土塗格子の撮影にご協力を戴いた川北昭様（財団法人放下鈴保存会理事長）ならびに奥様に心から感謝いたします。

注

- 注1) 新谷昭夫『京町家』光村推古院 1998
- 注2) 日向進『近世京都の町・町家・町家大工』思文閣出版 1998
- 注3) 高橋康夫『京町家・千年のあゆみ』学芸出版社 2001
- 注4) 丸山俊明「京都の町家におけるむしこ」日本建築学会計画系論文集第599号 pp143-148 (2006. 1)
- 注5) 中村利則「京都・町家考」『京の町家』淡交社 1994
- 注6) 池田俊彦「窓のデザイン」『日本の窓（淡交ムック）』所収 淡交社 1997
- 注7) 中村昌生『京の町家』淡交社 1994
- 注8) 藤井恵介/玉井哲雄『建築の歴史』中央公論社 1995、伊藤毅 日本史リブレット『町屋と町並み』山川出版社 2007
- 注9) 丸山俊明「京都の真壁と京都町奉行所の建築行政」本建築学会計画系論文集第596号 pp163-168 (2005. 10)、丸山俊明『京都の町家と町なみ〜何方を見申様に作る事、堅仕間敷事〜』(昭和堂 2007)第三章
- 注10) 前掲注4) 丸山俊明「京都の町家におけるむしこ」、前掲注9) 丸山俊明『京都の町家と町なみ』第五章
- 注11) 丸山俊明「近世初頭の京都における町家土蔵の配置」日本建築学会計画系論文集第623号 pp191-204 2008. 1
- 注12) 前掲注5) 中村利則「京都・町家考」
- 注13) 「京都屋造之初」『長刀鉾町文書』(京都市歴史資料館架蔵フィルム)
- 注14) 山田幸一 物語ものの建築史『日本壁のはなし』鹿島出版会 1985
- 注15) 狩野博幸『新発見 洛中洛外図屏風』青幻社 2007
- 注16) 前掲注9) 丸山俊明『京都の町家と町なみ』第六章
- 注17) 『京都町触集成』別巻二 pp196-197 岩波書店 1989
- 注18) 叢書京都の史料3『京都町式目集成』p252 京都市歴史資料館 1999
- 注19) 丸山俊明「17世紀の京都の町並景観と規制-江戸時代の京都の町並景観の研究(その1)」日本建築学会計画系論文集第581号 pp167-174(2004. 7)での見解を前掲注9) 丸山俊明『京都の町家と町なみ』第一章で改めた。
- 注20) 叢書京都の史料3『京都町式目集成』p89
- 注21) 『新修京都叢書』第一巻 臨川書店 1968
- 注22) 新編日本古典文学全集六四『仮名草子かなめ石』小学館 1999
- 注23) 文政13年(1830)『嬉遊笑覧』が「虫籠窓」に引用する俳諧。
- 注24) 前掲注9) 丸山俊明『京都の町家と町なみ』第六章
- 注25) 京都国立博物館蔵
- 注26) 『田中(近江屋吉兵衛)家文書』京都市歴史資料館架蔵フィルム
- 注27) 前掲注4) 丸山俊明「京都の町家におけるむしこ」
- 注28) 前掲注2) 日向進『近世京都の町・町家・町家大工』
- 注29) 前掲注26) 『田中(近江屋吉兵衛)家文書』
- 注30) 前掲注2) 日向進『近世京都の町・町家・町家大工』
- 注31) 京都府立総合史料館蔵『中井家文書』
- 注32) 滋賀県立図書館蔵『愚子見記』複製本

(2008年5月9日原稿受理、2008年6月27日採用決定)